

コラム

みやちゃん と ご一緒体験記

Vol.64

泣き言はいわない・・・

卒業や退職など人生のターニングポイントとなる3月。季節限定で咲き誇る可憐な桜はそれぞれの節目を素敵に演出してくれているようですよね。

“みやちゃん”こと薬剤師の宮原富士子さんは幅広い活動を展開されておりますが、そのひとつに「NPO法人がん哲学外来」の理事および事務局長としての仕事があり、自身は浅草を拠点に「勝海舟記念 下町（浅草）がん哲学外来哲学メディカルCafé」（以下、「がん哲カフェ」と表記）を主宰しています。全国津々浦々に存在する「がん哲カフェ」のとりまとめとしての役目からそれぞれのカフェ主宰者との交流も密に行っています。

3月28日、「がん哲学カフェ「虹」」を主宰する新木功久（しんき なるひさ）さんが長く活動が続いている「第19回 コスモスの会 朗読発表会」（毎年開催）が都内の会場で開催されました。この会は朝日カルチャーセンターの朗読のレッスンに参加する生徒たちによる発表会で、この日は14作品、16人の出演者でした。出演者の中に聴覚障害をもつ方がいるため、すべての作品に手話通訳者による同時通訳が行われました。

新木さんは最初に登場、作品名は「もしも突然、がんを告知されたとしたら。」より「人には「死ぬ」という最後の仕事が残っている」でした。

聴覚障害をもつ新木さんは、言葉を発することはできても人の話すことを聴き取ることができないため、言うまでもなく生活上の工夫が必要となります。さらに、10年前に大腸がんをわずらい手術・入院を経験した「がんサバイバー」でもあります。その上、がんが見つかった後に発達障害があることもわかりました。

2人に一人ががんになる時代ですから、これまで健康だった方だけががんになるわけではありません。新木さんのように障害をもっていたり、脳や心臓系の重篤な病気にかかっていたり、

認知症になっていたり……様々な背景をもっている方にもさらなる不運が重なることも十分にありえます。運命を受け入れどんなに前向きに生きていても「なぜ自分ばかりこんな目にあうのだろう……」と考える日もある（あった）と思います。

障害をもって生きてきた人生には幾度も生きづらさを覚えていただろうし、がん患者となり不安や恐怖を感じてきたことは想像に難くありません。だからこそ試練の数だけ人に優しくなれるのでしょう。

自分と同じような思いを抱える方々に寄り添いたいという強い思いから「がん哲学外来」の存在をしり、がん哲カフェを開くために2025年、「がん哲学外来コーディネーター」となりました。そして、すぐに東京都葛飾区で「がん哲学カフェ「虹」」を立ち上げてカフェの運営にあたっておられます。

泣き言をいっても人生は変わらない。

ハンディキャップをもっている、生きている。

人生という“生きるチャンス”をプレゼントしてもらった。

ならば、誰でも等しくいつかは死ぬのだから、精一杯生きてゆくのみ。

ポジティブに生きる新木さんの生き様は、がん哲カフェに足を運んでくる方々を勇気づけてくれることでしょう。

※各地のがん哲学外来カフェ <https://gantetsugaku.org/cafe/#TOKYO>

※「がん哲学カフェ「虹」」 次回開催は、5月31日（日）13：30～15：00です。

会場/日本キリスト教団 堀切こうとう教会1階集会室

